



わらじ作りを
体験しました！

こちバス新聞

六月二十五日(土)・二十六日(日)の二日間、高知市北本町・藁工倉庫グラフィティで高知大生六人が「わらじ」づくりに挑戦！見よう見まね、悪戦苦闘で、わらじにはならなかったが、無心で藁に向き合った。

★発行★
こらパ〜

◆次のこちバスツアーは「土佐市宇佐シヨートステイ！」◆七月二十三日(土) ◆参加費は千六百元。◆地元おばちゃんとのまち歩き、うるめ、お菓子つまみ食い他。◆詳しくは学生会館(イクス) 2階・「コラボレーションサポートパークまで！」

★六月二十五日(土) 快晴

「わらじ」は一日にしてならず

「わらじ」づくりを指導してください。藁工倉庫オーナー・池田文七さんのもと、大学生・職員・藁工ミュージアムスタッフの計7人で翌日に向け準備。

藁をまず一足分相当に束ね茎の部分揃える。地面にトントンと縦に落とし、落ちてきた渋皮を抜く。ある程度大きな皮が抜けると地面に横向けに軽く叩きつけるなどして残った渋皮を手作業で除く。これを繰り返す。素人だと一束につき一時間ほどかかってしまう。なかなか難しい。七人がかりでゆうに三時間経過後、やっと翌日の参加者十四名分の渋皮抜きが完了した。その後、水でしめしてブルーシートにくするみ日陰で一夜置いて作業終了。

★六月二十六日(日) 曇りのち雨
無心・無言の「わらじ」作り。

藁工ミュージアムの方に建設予定地でお話を伺った。

藁工倉庫は戦後、藁の保管を目的に建てられ、五十年以上が経過している。土佐漆喰の白壁に三層の水切り瓦が江の口川の緑に映える。屋根には安価なセメント瓦が使用されている。ミュージアムは高知のスピリチュア

ル・アートの保護・保存を目的に開設される。現在、県下の病院や施設を周り作家から作品を収集しているところ。昭和の建築遺産を守りつつ、ミュージアムを高知の文化エリアにしたいとのこと。

「わらじ」作成は、木槌で藁を打つところから。二人一組で藁を叩いてやわらかくする。女性の力だと二往復しないと柔らかくならないため、一人が木槌で叩き、一人が藁の束をくるくる回して引く。

そしていよいよ、縄をなう。しなった藁3〜4本をふた組手に持ち、茎の部分がバラバラにならないように束ねて、両手に藁を挟み、寄りをかけながらツイスト状の縄にする。これを4本作る。が、予想通り上手く出来ない。寄り過ぎると硬い縄となり履いた時に痛く、ゆるすぎてもいけない。

ないあげたら、次は二本を一つにつなげる作業。池田さんの手を見よう見まねで長い縄に仕上げる。そうして出来た長縄でわらじの外枠を作るのだがここでタイムアップ。履いては帰れなかったが、無心・無言で藁に向き合った充実感が表情にあふれていた。

苗を植え、稲を育て、米を食し、藁で生活の必需品を作る。先人の知恵と文化に思いを馳せた二日間だった。

